

P2-055

小児看護学実習における保育実習での学生の学び—健康教育の実施に焦点を当てて—

山本 裕子、上山 和子、西村 美紗希

新見公立大学 健康科学部 看護学科

【はじめに】 本学の小児看護学実習で保育施設実習を実施している子育てカレッジは就学前の子どもが誰でも利用できる市が運営している子育て支援の場である。保護者が子どもと一緒に過ごす場であり、親子同士が関わったりすることのできる交流の場としても提供されている。本学ではこの実習施設の特徴を生かし、家族から日頃どのようなことが気になっているかなどを直接聞き、施設を利用している子ども、保護者へ健康教育を実施している。

【目的】 小児看護学実習の保育実習で実施している健康教育からの学生の学びを明らかにし、今後の実習指導を行う上での示唆を得ることを目的とする。

【方法】 1) 研究デザイン：質的帰納的研究。2) 2018年9月～2019年7月に小児看護学実習を履修した学生で、本調査に同意の得られた43名分の保育施設実習記録。3) 調査時期：2019年12月。4) 調査方法および分析方法：保育施設実習記録の中から健康教育の実施によって得られた学びに関する記述を抜き出し Berelson,B の内容分析を参考に、意味内容の類似性に基づき集約しサブカテゴリー化、さらに意味内容の類似性に基づきカテゴリー化した。5) 倫理的配慮：小児看護学実習修了後に研究目的、研究方法、匿名性の確保、成績に関係しないことを明記した本研究に関する説明書を配布し、文書および口頭にて説明をした。参加は自由意思に基づき、同意が得られない場合でも不利益が生じないこと、成績評価には影響しないことを保障した。新見公立大学倫理審査委員会の審査を受け実施した。

【結果】 分析の結果、《子どもへの伝え方の工夫》《習慣化できる健康教育内容の選択》《保護者へ情報提供する際の注意点》《子どもの特徴を捉えた事前準備の必要性》《健康教育効果の評価の視点》の5カテゴリーで構成されていた。

【考察】 学生は、健康教育を効果的に実施するためには、子どもの特徴を捉えることが必要であると学んでいた。保育施設実習1日目に捉えた子どもの特徴を考え、健康教育に活かすことができていた。また、家族への情報提供や家族への働きかけでは、家に帰っても可能である「習慣化」を意識した健康教育内容の選択の必要性を学んでいた。現在、学生は健康教育の効果を子どもや保護者の反応で評価しているが、今後は保護者の意見も評価の対象とし、学生の気づきの機会を増やし、今後の健康教育へ活かしていく必要があると考える。